▶OfByForコラム◀

地域の
地域による
地域のための
Something
NEWS

第㉖回

地域を整備するエコミュージアム
――「インスタ映え」を超える価値表現

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp
代表理事 佐藤 建吉

▼地域資源の掘り起こし

地域の活力となる資源には色々あり、地域の魅力を生み出すことが出来る。それには、自然や地勢などのほか、歴史・文化など社会的な資源もある。地域活性化ではしばしばヒト・モノ・コトなどと言われ、経済的インパクトを重要視している。

本コラムは、地域の地域による地域のためのSOMETHINGを掲げているが、それは地域内の人々により主導されるのが最もよい。が、地域に住む人は地域資源の価値に気づかいこともあり、むしろ地域外の人によって、潜在する資源の発掘に期待されることもある。

今回は「エコミュージアム」を取り上げ、論じてみたい。

▼エコミュージアム

「エコミュージアム」については、過去にさかんに言われていたが、あまり定着していない。その理由には、「エコ」にあるのかもしれない。したがって、「エコ」という言葉がしっかり理解されていれば、「エコミュージアム」も定着しやすいのではと、筆者は考えている。

「エコ」とは、ラテン語に語源があり、意味は「我が家」であるという。これを少し拡大すれば、自分たちが住んでいる地域ということになる。

「ミュージアム」の主な仕事は、資料の①収集・管理・保全、②公開・展示・解説、③調査・研究・講習・講座、等である。その担い手は学芸員や館長で、キュレーターと呼ばれる。「エコミュージアム」では、地域の住民がキュレーターとなる。

地域の資源が、①～③の対象になる。自然や不動産も資源であるので、どこかに移動は出来ない。その地で、①～③が行われるので、「エコミュージアム」は、地域の〝街が丸ごとミュージアム〟は、ピッタリな表現でもある。

▼エコミュージアムの役割

さてエコミュージアムでは、地域資源の①収集・管理・保全がなされるが、収集は資源の掘り起こしなどともいわれる。その対象は、実は現に存在しているものであり、新しい価値を見出すことでもある。それは、まさに、「イノベーション」と同じことであり、収集・分類・整理して、新たな生命や価値を付与し、明確化することである。地域資源としての整備保守点検し、保全することも伴う。

例えば、商家の屋敷などは地域資源である。

②公開・展示・解説は、その価値を住民や観光客に分かりやすく表示し、伝達することである。それは、しまい込むのではなく、展示に堪えるように保守点検し保全することである。

前出した商家の商品や財産などは、分かりやすい②の対象である。

③調査・研究・講習・講座では、その地域の特徴化を多面的に拾い出し、分かりやすいストーリーとして構成、解説することが必要である。

商家の例では、商品とその流通、地場産業との関わり、さらに地域や国内外経済との関わりなどの調査と講座、あるいはワークショップ等が行われる。

▼地域密着のエコミュージアム

こうして見ると、エコミュージアムはOfByForと深いつながりを持つことが分かる。それは、地域住民がキュレーターとして地域を表出することであり、地域をまず知ることが出来る。そして、住民が観光客に、明解に説明できるようになる。

実例として、筆者は、2008～09年に、千葉県のいすみ鉄道と小湊鉄道の沿線を対象にして、「房総横断鉄道沿線のエコミュージアム環境整備」という活動を、国交省の補助事業として行ったことがある。

それでは、エコミュージアムという意味を地域住民に理解して頂くことと、地域資源の発掘のための体験調査を行い、さらに住民がそのキュレーターとなるため、まずリーダーとなるコンシェルジュの養成、また、駅舎やその近郊の調査を行い取りまとめを行った。その後、若い学生たちに沿線の活性化提案とその展示等をして頂いた。

それは、地域の観光開発、観光ポイントの提示とアクセスマップの作成、観光商品の開発等、総合的な取り組みであった。今日のSNSツールの時代では、「インスタ映え」させるためのポイントの発見や整備でもあった。

エコミュージアムは、観光という地域経済振興の直達的な面ばかりでなく、地域文化の保全、そして地域理解と解説、さらに住民の地域への愛着形成などの側面があり、広く言えば、地方再興、地方復権の波動の広がりにもなるだろう。

千葉県でのトピックスとしては、房総横断鉄道沿線の市原市田淵の養老川の崖壁の地層が、77万年前の磁場逆転時代を含む中期更新世の代表に「チバニアン」と命名されることが内定したことがある。これは国際的な地域資源であり、「エコミュージアム」として、②・③が、展開されるだろう。

「チバニアン」の地層。現在の磁極のS極とN極が逆転していたという